

日本とEUの教育研究交流

「相互発信の時代に向けて」 神戸からの取組み

英国学術調査報告

英国における大学に対する

研究評価（REF）制度

— 結果と総評

第三回 在英研究者の者窓から

No. 44

JSPS London

NEWSLETTER

日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター 2015年2月～4月 ニュースレター

巻頭特集「日本とEUの教育研究交流」	2	スタッフ写真館 今月の一枚	11	JSPS スタッフコラム	16
Norwich 及び Colchester において事業説明会を実施	6	センター長のつぶやき	12	Pre-Departure Seminar and Alumni Evening 開催	17
ロンドン近郊の3大学を対象に事業説明会を実施	6	赴任のごあいさつ	13	退任のごあいさつ	18
ぼりーさんの英国玉手箱	7	在英研究者の者窓から 第三回	14	JSPS Programme Information	19
英国学術調査報告 英国における大学に対する 研究評価（REF）制度— 結果と総評	8	University of Leicester 他4大学にて 事業説明会を実施	15		

巻頭特集 日本と EU の教育研究交流

相互発信の時代に向けて・神戸からの取り組み

神戸大学ブリュッセルオフィス

EUと日本とは、さまざま社会的・文化的要素を共有している。それは政治的理念を含む高度な価値観からはじまって、少子・高齢化など社会構造、知識集約型産業やときに「ニューエコノミー」ともいわれる産業構造、先端的なポピュラー文化が席捲する人々の日常意識のあり方にまでおよぶ。もちろん相違もある。欧州とくに「西欧」は、何よりも現在の世界全体をおおっている中心的文化、わけでも近代文化の源であり、なおその強力な発信地である。遅れて近代化した諸国（日本を含む）はもとより発展途上国も、こうした欧州の歴史上の、また現代にまでつながる文化的・社会的影響力を免れている地域はこの地球上におよそ考えにくい。近年、「ポスト・近代」がいわれ、文化的発信元の多元化がいわれて、日本のサブカルチャーや、韓国のドラマやポピュラーソング、中国の映画などがグローバルな市場を得ているが、こうした文化の多元性を許すという基本的理念そのものが、西欧に発信していることは皮肉な事態であるといわねばならない。

こうしたEUという地域の圧倒的な重要性をふまえると、日本の高等教育機関が果たしてきたこの地域との共同研究や教育・連携は果たしてそれに見合うほど充分なものだったのかどうかという問題が生じる。神戸大学がこの点で果たしてきた活動を僭越ながら披瀝してみたいと考えたことにはこうした背景がある。

2010年9月、神戸大学はEUの主要機関が集中するいわばその「首都」であるブリュッセルに、海外オフィス「神戸大学ブリュッセルオフィス」を開設した。2011年4月から神戸大学学長補佐を務め、2013年3月までEU総合学術センター長でもあった（この職務に関しては筆者の前任者）久保広正は、オフィス開設の目的を、以下の諸点に過不足なくまとめている。「(1) EU圏にある大学・教育機関との学術交流の支援、(2) 教育・研究に関する情報収集の拠点としての活動、(3) 教育研究に関する情報発信の拠点としての活動、(4) 留学生・研究者のネットワーク構築、(5) 在欧の企業・団体との連携支援、(6) 職員の海外研究、インターンシップ支援など」である（「神戸大学ブリュッセルオフィスの活動」、ウェブマガジン「留学交流」2011年11月号Vol.8、独立行政法人日本学生支援機構、pp.1-5）。

このオフィスはまた独自のワークショップを開催できる設備を持つと共に、遠隔地会議システムを備え、神戸大や日本を結んだ会議や授業が可能である。

オフィスの開設をうけ、オープニング記念シンポジウムがブリュッセル市内において翌2011年3月に行われた。これも上記久保の記述に基づいて紹介しておきたい。まず開会に先立ち、当時のヴァンロンプイ欧州理事会議長（いわゆるEU大統領）に神戸大学から名誉博士号が授与された。ついで、「日欧教育研究連携の新時代」と題するメイン・シンポジウムが開催され、清水潔文部科学事務次官（当

時）、V.カウエンベルグ・ヘント大学長（当時）、小田野展丈欧州連合日本政府代表部特命全権大使（当時）、福田秀樹神戸大学長などによる講演・パネルディスカッションが行われた。その後、6つの「研究セッション」に引き継がれたのである。その後も、このオフィスを活用したシンポジウムやワークショップはあわせて毎年10回程度開催されてきており、当初の開設目的は着実に果たされてきているといえる。特に第1回のメイン・シンポジウムの成功をうけ、その後も多くのワークショップの他に、年に1～2回は、いわば総合シンポジウムを市内において開催している。2014年10月のそれは第5回となり、これまでと同様にEUの著名な専門家・高官、高等教育担当官、日欧の専門家・高官も参加した大規模なものとなった。

オープニング・シンポジウムで語るヴァンロンプイ大統領（当時）



オープニング・シンポジウムで語るヴァンロンプイ大統領（当時）

オープニング・シンポジウムで語るヴァンロンプイ大統領（当時）

EU地域と神戸大学

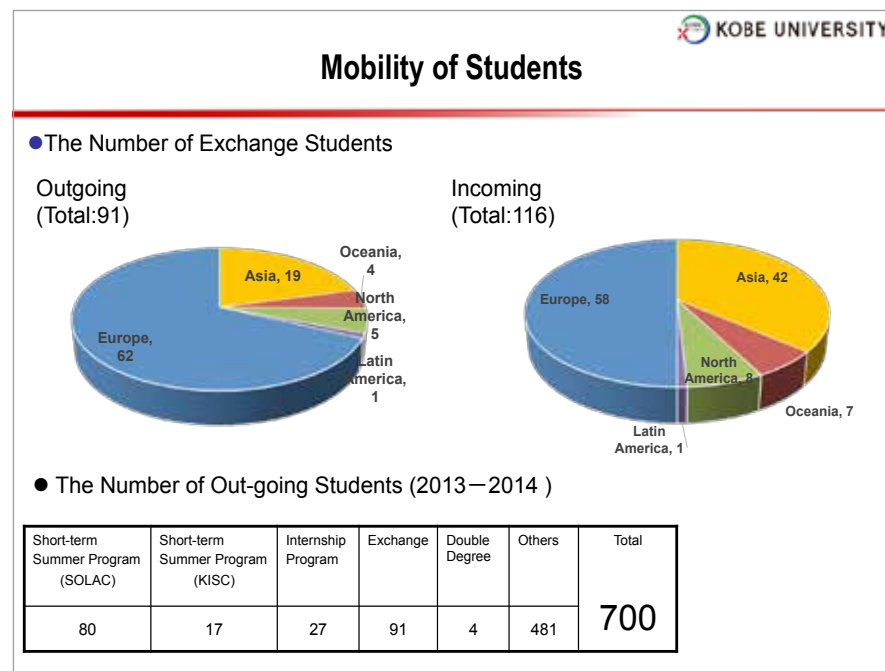
ここで、EU諸国と神戸大学との教育研究交流について、もう少し広い視野からみるとつぎのようなことがいえる。まずブリュッセルオフィス創設の背景とし



て重要なことは、2005年から活動を開始している「EU インスティテュート (EUIJ) 関西」の存在である。上記久保の文章を引用しておく。「これはEUからの資金援助を得て、神戸大学、関西学院大学、大阪大学からなる大学コンソーシアム（主幹校は神戸大学）に設立されたEUに関する教育研究拠点である」（前掲書、p.2）。このEUIJを拠点として現在まで勢力的

な教育研究活動を展開してきた。さらにこうした活動を基盤として、文部科学省と欧州委員会共同のダブルディグリープログラムである「日・EU 間学際的先端教育プログラム」にも採択された（2013年から4年間）。

さらに組織体制としては、上記ブリュッセルオフィスの統括をはじめ、EUとの包括的な学術研究・教育交流を進めるた



めの機関として、「EU 総合学術センター」を2011年から設置している。神戸大学全体として、国際交流を統括する組織である「国際交流推進機構」があり、その下に「EU 総合学術センター」、「アジア総合学術センター」、「米州交流室」が設置されるという構成である。井上典之・神戸大学副学長・理事が、この機構全体を統括している。

また、神戸大が海外にもつ連携交流機関では、アジアのそれが144機関51%と最大であるのは当然としても、つぎにくる地域はじつは欧州の89機関31%なのである（2014年5月現在）。つまり神戸大の公式な連携交流相手先は、アジアと欧州とが2大地域を構成している。また、交換留学生（留学生全体でなく交流協定による交換留学生）についてみても、



受入れは欧州からが最大で58%、送出しも欧州が最大で62%となっている。研究者の交流に関しても、受入れでは、全体の16%を英独仏3国で占めており、送出しについては、英独仏にベルギー、イタリアを加えると23%におよび、これらはいずれもアメリカ合衆国とのそれを上回る。これは神戸大がいかにEU諸国との教育研究交流に力を入れてきているか、実績を持つかを示すものである。これらの交流相手先には、オックスフォード大学を含む。同大で日本研究を専攻する学生の全員12名が毎年1年間、神戸大に留学し日本語と日本社会文化の学習に専念する特別プログラム（「神戸-オックスフォード日本学プログラム」）が締結されており、第一期として5年契約であるが、2014年はその3年目にあたる。

EUと神戸を結ぶ新たな戦略

もともと神戸大学は、文理融合を目指す総合大学としての性格をもっている。人文系・社会系・自然系・生命/医学系という4大系列が適度な規模において隣りあいながら存在し相互に刺激を与えつつ発展してきた。こうした性格はEUとの教育研究連携についても1つの強みになるものと考えられる。実際に、上記の総合シンポジウム

においても、1つの系列に偏ることなく多様な領域からのセッションを組織している。

現在、EUでは科学技術・高等教育に関するフレームワーク・プログラムとしてHorizon2020が始動している。これは、まさに基礎学問から応用科学技術分野までの幅広い領域をカバーするものであり、文理融合を進める神戸大としても強いコミットメントを有する。実際に、自然系・理系の分野では、神戸大学はすでにFP7事業（Horizon2020はこの後継事業と考えられる）の一環としてのJEUPISTEというプログラムに、2013年度から参画している。これについては、神戸大のHPに記載があるので引用しておきたい。

欧州の第7次研究開発枠組み計画（FP7）の国際協力促進プログラムの一環として設置されている科学技術における二極間パートナーシップ強化開発事業（BILAT）の1つとして採択された「日EUイノベーション・科学・技術協力強化プロジェクト（JEUPISTE）」が2013年9月から3年間にわたって実施される。本プロジェクトのコーディネーター機関は一般財団法人貿易研修センター内の日欧産業協力センター（本部：東京）で、他に日欧の9機関が参画しているが、神戸大学は、コーディネーター機関の日欧産業協力セ

ンターを除き、我が国で唯一の参画機関となり、特に国内アカデミアへの欧州との連携の可能性や必要性について情報の発信と普及を図る役割を担っている。具体的な活動内容は、①日欧政策対話への貢献 ②情報提供（日・EU間における情報サービスの展開）③パートナーシップ形成支援 ④コンタクトポイントの形成（ヘルプデスク等含む）とトレーニング（URAなど共同プロジェクト運営に係る人材開発）⑤アウトリーチ、メディア等との連携—である。

神戸大学は、これまでに培った欧州とのパートナーシップを生かして、国内外で本事業を推進している。本事業のキックオフ会議は、2013年9月9日、10日に本学のブリュッセルオフィスにて開催され¹、2014年5月29日には本学でJEUPISTEプロジェクト主催「Horizon 2020 情報提供セミナー」を開催し²、10月14日の神戸大学ブリュッセルオフィス第5回シンポジウムもJEUPISTEプロジェクトとの共催となった³。さらに、2015年2月4日に、神戸大学バイオプロダクション

次世代農工連携拠点第6回国際シンポジウムの一環としてJEUPISTEプロジェクト主催ワークショップ“Biobased Chemical production” – Japan-Europe academic workshop for sharing ideas and experiences towards strategic partnership buildingを開催し、国内アカデミアへの当該研究分野における日欧共同研究の展望をアピールした⁴。

こうしたFP7への参画は、まさに「国内で神戸大学がリードして築いてきた欧州とのパートナーシップ」の成果の1つである。さらにその後継であるHorizon2020、また若手研究者も含む教育計画であるErasmus+へのコミットメントについても、神戸大はつぎのような戦略を持っている。

まず、本年2015年の10月から神戸大では、「現代日本教育研究センター」を立ちあげる。この新たなセンターの特徴は基本的に2つあり、第1は、すべて英語による教育を行うこと、第2は、現代日本にかかわる総合的な社会文化現象を教えるため、人文・社会・自然・生命/医学といったほぼすべての学問分野を総合

¹ http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/topics/t2013_08_26_01.html

² http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2014_06_04_01.html

³ http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2014_10_24_05.html

⁴ <http://www.office.kobe-u.ac.jp/ipep/ceus/jeupiste.html>

Student Exchange with Oxford University

Faculty of Letters at Kobe University is accepting 12 undergraduate students (sophomore) from the Department of Japanese Studies, the Faculty of Oriental Studies at the University of Oxford for a one-year period (2012~2016)



A courtesy visit to President H. FUKUDA by the Oxford University students studying under the Kobe-Oxford Japanese Studies

的に動員すること、である。対象は留学生および日本人学生で、もちろん希望する留学生には日本語を専門的に教授する科目も設定する。昨年秋から今年にかけてEUの様々な大学を訪問してこの新たなセンターについての説明を行ってきたが、反応はいずれもたいへん好意的であった。この新たなセンターの設置により、受信超過傾向の否めなかったEU地域との交流をよりバランスあるものにするのが一つの目的であるが、何よりも既存の「EU総合学術センター」との組み合わせにより、送出／受入双方での留学生数を飛躍的に増大させることが狙いである。

つまり、既存の「EU総合学術センター」が中心となって動員するEU機関との教育研究交流に関する資源と、新設する「現代日本教育研究センター」が中心となって動員する日本関係の資源とを、「有機的に組み合わせる」ことにより、留学生・研究者の受入と送出双方の側面を飛躍的に増進させるという戦略である。いいかえれば、EUからの発信を受けとめる側面と、日本からも発信していく活動とを相互に組み合わせた相互発信の仕組みを創り出すことが、EUと日本との新時代を切り開いていくはずだという考え方である。

こうした制度的基盤や組織的な受け皿を準備することにより、また同時にこれまで「神戸大学がリードして築いてきた欧州とのパートナー」機関に積極的にこの仕組みを提示することによって、基礎学問から文理融合的な領域にいたるHorizon2020のプログラム、さらに教育プログラムであるErasmus+にに応じていくことも可能となる。Horizon2020の枠組みの中には、ERCという個人研究者主導型の申請も含まれ、私事にわたるが筆者は、ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベック（2015年1月に急逝）が代表者となっている申請（Advanced Grant 2013年度採択）のCOSMO-CLIMATEというプロジェクトの一員である。この枠は、原則として世界の研究者に開かれているはずであるが、日本からの応募が多いという話は聞かない。

さらに近年神戸大は、中欧の卓越した諸大学との連携を強化している。カレル大学（チェコ・プラハ）、ヤゲウォ大学（クラクフ・ポーランド）、エトペーシュ・ロランド大学（ELTE大、ブダペスト・ハンガリー）などである。また必ずしも中欧ではないが、ライデン大学（オランダ）や、ハンブルク大学などドイツの諸大学との連携も一層強化しようとしている。

特に、カレル大、ヤゲウォ大、エルテ大は、ヴィシエグラード・グループ（Visegrad Group、チェコ、ハンガリー、ポーランド、スロバキアという中欧4ヶ国による独自組織）のメンバーであり、このグループの枠組みを活用した連携も一つの方向として現れている。そして実際に、これら諸大学には、上記2つのセンターの「有機的な組合せ」による連携強化の案を提起しており、急速に具体化が進んでいる。既にヤゲウォ大とは昨年、神戸大学教員による比較文明・日本研究分野に関わる

教育コースを実施した。さらに今後とも、こうした活動をじっさいにすすめていくインフラとして、EU域内においては、Horison2020、Erasmus+、Visegrad Groupなど、国内においてはJSPSなどの枠組みやインセンティブを積極的に組み合わせマッチさせて活用していく必要があると考えている。

油井清光
神戸大学EU総合学術センター長
大学院人文学研究科・教授



Norwich 及び Colchester において事業説明会を実施

2015年2月9日から10日にかけて、竹安センター長、松本副センター長、Ms Watson International Programme Co-ordinator、香月国際協力員はイングランド東部の Norwich 及び Colchester に位置する John Innes Centre, University of East Anglia, University of Essex の3機関を訪問し、事業説明会を開催した。

John Innes Centre は1910年にロンドンに設立された植物学・微生物学の研究所であり、現在は Norwich Research Park 内に位置する。Norwich Research Park は農業、食品から健康・医学・環境の分野まで幅広くカバーする研究所群で John Innes Centre のほか Food Science Institute, The Genome Analysis Centre, 農業病や害虫の研究を行う The Sainsbury Laboratory も設置されている。また、近隣の University of East Anglia や National Health Service の機関である Norfolk and Norwich University Hospital とも共同して研究を行っており、英国内において地域ごとに生み出される学術論文数を関連分野で比較した場合、この地域はロンドン、オックスフォード、ケンブリッジに次ぐ第4位となっている。事業説明会には John Innes Centre に限らず近隣の研究所からも多くの研究者が出席した。説明会終了後は John Innes Centre, The Genome Analysis Centre と今後の協力について議論を交わすとともに、研究施設の見学を行った。

続いて説明会を行った University of East Anglia は1963年に設立された総合大学である。学内には大学の日本学センターのほか、付属施設として The Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures (セインズベリー日本芸術研究所) が設置されている。両者は連携して日本研究を行っており、日本への関心が高い大学である。今回の事業説明会は大学主催のイベントである Global Opportunities Week 内の Japan Day の一環として行われており、JSPS London のほかにも過去に日本への留学経験のある卒業生からの体験談や DAIWA Foundation 等からプログラムの紹介も行われた。事業説明会には多分野からポスドクを中心に多くの参加者があった。参加者の関心も高く説明終了後には多くの質問が寄せられた。また、説明会終了後には JSPS スタッフと参加者との懇談の場が設けられ、プログラムの内容や日本での生活についてさらに多くの質問が寄せられた。

2月10日は University of Essex を訪問した。University of Essex は1964年に設立された総合大学であ

る。特に社会科学の分野において強みを持っている。また、世界130ヶ国以上から3000人以上の学生を受け入れており、また、HEFCEの実施する National Student Survey において2013年度の学生満足度が英国主要100大学で2位に位置するなど教育に力を入れている大学でもある。事業説明会では社会科学を中心に多くの研究者の参加があった。

今回訪問した John Innes Centre は JSPS London が初めて訪問した機関であったが、特徴的な研究を行い非常に高い研究のパフォーマンスを持った機関であった。今後も英国内の研究所の情報収集を継続し、John Innes Centre のような研究機関と積極的に交流をすることが重要であると感じた。(香月)



竹安センター長と Professor Dale Sanders, Director of the John Innes Centre

ロンドン近郊の3大学を対象に事業説明会を実施【1/2】



Brunel University London の関係者と

2015年2月11日から13日にかけて、ロンドン近郊の大学を対象に事業説明会を集中的に開催した。訪問大学は、Brunel University、King's College London、Royal Holloway、University of London の3大学。

2月11日に訪問した Brunel University は、ロンドンの中心地から地下鉄で50分程離れた場所に位置する総合大学。同大学は、1966年に設立され、現在では15,000人の学生が在籍し、そのうち2,500人程が110ヶ国以上の留学生となっている。未来志向型の大学で、卒業生の就職率向上に努めており、殆どのコースが4年間のサンドイッチコース(卒業まで4年で3年次に職場体験を行う)となっており、卒業生の平均初任給は英国内平均よりも3,000ポンド/年高いと言われている。Times Higher Education World University Rankings (2014 - 2015年)で226~250位にランクインしている。また、同大学は、近年学際的な学術研究にも注力している。

2月12日に訪問した King's College London は、英国のロンドン大学を構成す

Recent Activities

ロンドン近郊の3大学を対象に事業説明会を実施【2/2】

るカレッジの一つで、1829年に設立され、イングランドでは4番目に古い名門大学である。同カレッジは、ラッセルグループのメンバーで、学生数は19,495名とロンドン大学のカレッジでは最大を誇る。Times Higher Education World University Rankings (2014 - 2015年)で40位にランクインしている。また、2013年度にノーベル物理学賞を受賞したProfessor Peter Higgsを含め、過去に12名のノーベル賞受賞者を輩出している。

2月13日に訪問したRoyal Holloway, University of Londonは、King's College Londonと同様、ロンドン大学を構成するカレッジの一つである。同カレッジは1879年に、軟膏などの薬を発明し成功したThomas Hollowayによって創設され、当初は彼の妻の意向により、女性への高等教育を促すという理念の下、女

学校として開設されたが、後に男女共学となった。美しい校舎と学際教育が特徴であり、世界各国から優秀な生徒を数多く集めている。Times Higher Education World University Rankings (2014 - 2015年)で118位にランクインしている。なお、International Outlookでは、2014年英国国内で第1位の座に輝いている。

上記3大学で実施した事業説明会には、計約60名の参加者の出席があり、どの大学も、我々の訪問に対して大いに歓迎して頂き、説明会のみならず、個別会合、キャンパスツアーやネットワーキングランチ等の機会を頂き、当センターの活動内容に理解を示して頂く絶好の機会となった。今後も、ロンドン近郊の大学に頻りに訪問し、良好な関係を構築していくことも、当センターの一つの目標としていきたい。(松本)

大学の創設者 Thomas Holloway 夫妻の像と美しいキャンパス



Q プレゼンテーションスキル

事業説明会等のイベントで、素晴らしいプレゼンテーションをし、参加者からの幾多の難しい質問にも答え、英国の優秀な研究者からの応募を増やすことに大きく貢献しているポーリーさん。その卓越したプレゼンテーションスキルはどのように身につけたのですか？

A 英国では、人前で自分の意見等を発表し、評価される機会が、学校教育の一環として設けられています。例えば、5～6歳の小学生の頃から、'Show & Tell Days' といって、週末に何をしたかななどをクラスで発表する時間があります。また、大学のセミナーでは、毎週、課題文献を読んだ後に論文を書き、自分のアイデアを発表します。これを毎週繰り返し、学期の終わりには、自分のセミナーの中にとどまらず、自分の学科の教授や他の学年の学生の前で論文を発表しなければなりません。発表は、査定され、批判され、難しい質問にも対処する必要があります。成功するためには、それらに対処するスキルを身につけるしかなく、逃げ場はありません。このように、多くの練習を重ねてきているのです。私がプレゼンテーションをする際に心がけていることは、聴衆の存在を恐れないこと、自分のプレゼンテーションに集中すること、大きな声でクリアに発声すること、聴衆の関心をそがないよう分かりやすい説明をし過大な情報を伝えないこと、時間を守ることです。時間を守ることはイベント開催者や他の講演者に敬意を払うという意味でも重要です。自信のある態度で行うことも大変重要です。その点、JSPSの事業は世界でも有数の優れたプログラムなので心から自信をもってプレゼンテーションを行うことができます！

ポーリーさんの
英国玉手箱
tamatebako



日本人の素朴な疑問に英国人ポーリーさんが答えてくれます。なにか疑問に感じたら、①氏名 ②所属 ③住所 ④質問事項を明記のうえ、ニュースレター編集室 enquire@jps.org まで、お送りください。質問採用者には粗品を差し上げます。

英国における大学に対する研究評価（REF）制度—結果と総評【1/3】

Point

- 英国の高等教育機関研究評価制度は、刷新されてから第1回となる結果が2014年12月18日に公表された。
- 制度の透明性と健全性を重視する英国の4地域の高等教育財政会議は、結果発表後も、情報公開と制度についての様々な角度からの検証・見直しに努めている。
- 結果を受けて、一部の大学・カレッジにとっては厳しい予算計画を強いられることが判明した。

はじめに

2014年12月18日、大学・カレッジ（Higher Education Institutions。以下、「HEIs」という。）に対する研究評価制度 Research Excellence Framework（以下、「REF」という。）の結果が発表された。本結果が、公的助成のうち研究活動にかかる経費である研究助成配分額に直接反映されるため、HEIsにとってはもちろん、関係者にとっても非常に重要な日となった。

REFは今回が初めての実施となる新・研究評価制度で、前回は2008年に行われ、旧評価制度 Research Assessment Exercise（以下、「RAE」という。）の最後の実施となった。制度の刷新に着手した英国の4地域（イングランド・ウェールズ・スコットランド・北アイルランド）高等教育財政会議は、様々な協議を重ねた末2011年度に評価を行う専門家を任命し、HEIsらと最終協議の末、基準と指針を発表した。2012年度に各HEIsがどの評価ユニットに申請するかを決定の上、2013年11月29日までに申請が行われた。そして、研究者898人と259人の研究成

果を利用する側である Research User¹の専門家からなる評価議会がそれぞれ申請を査定し、2014年12月18日の発表へと至った²。

本稿においては、REFの結果概要と、REF制度の評価・見直し、ならびに結果を受けた各HEIsへの助成配分について紹介したい。

結果概要

全体の数字としては、154大学がその研究計画（群）を評価され、また、1,911件の計画申請数を記録した。これには、5万2,061人のアカデミックスタッフが関与しており、19万1,150件の研究成果及び社会に対するインパクト事例研究として6,975件が寄せられた。評価は、「研究成果（65%）」、「社会に対するインパクト（20%）」、「研究環境（15%）」についてそれぞれ明確な基準・規則を設けて、各割合で総合評価を算出している。

全体の申請に対する総合評価のしめる割合内訳は、以下の通りである（最高評価が4*で、以下1*まで4段階評定）。

- 4*「世界を先導する質の高さ」 — 30%
- 3*「国際的に優れた質の高さ（であるが先導すると評価するには足りない）」 — 46%
- 2*「国際的に認められる質の高さ」 — 20%
- 1*「国内的に認められる質の高さ」 — 3%

2008年実施のRAEとは査定法が改訂されたため単純比較はできないものの、こと研究成果に関する指標を取り出して比較してみると、2008年には14%であった4*の割合が22%、37%であった3*の割合が50%以上と大幅な改善がみられ、研究において英国が世界を先導する地位に位置づけられていることを再認識させられる結果となった³。

評価分野は、4つのメインパネル（A：医学・生命科学、B：物理科学、C：社会科学、D：芸術・人文科学）に分けられているが、80%以上の物理科学・医学・生命科学の研究が4*もしくは3*の評価を得た。これは、芸術・人文科学の71%、社会科学の69%と比べても高く、理系優位の結果となった。物理科学は、全4メインパネル中、4*の評価の割合が一番低い（26%）ものの、3*の割合は57%と最も高い割合を記録している。このため、3*と4*を併せた数字は83%となり、これは、医学・生命科学の双方の数字を併せた81%を超える。

一方、芸術・人文科学は、4*の割合の高さとしては医学・生命科学に次いで2位の30%となっているが、3*の割合は全分野の中で最も低く41%にとどまっている⁴。

結果発表後

○情報公開・制度の検証

REFのあらゆる要素に関して透明性を重視する英国4高等教育財政会議は、2015年1月19日に、合計1,911件の個別の申請書類を全て一般公表した。

また、REFという新制度に関して様々な角度から検証し、随時報告書を作成、発表している。その例として、1月27日に発表された、各メインパネルによる報告書、REF「機会均等ならびに多様性」委員会による報告書、大学における研究者選抜の際の行動規範に関する報告書、パネル委員リストなどが挙げられる。中でも、公平性・多様性の保証には特に力が入れられており、各HEIsは公平で公正な研究者選抜の実施基準を適用し、公平性のインパクト査定も行った。少ない研究成果での申請となるキャリアの浅い研究者や期間中の産前産後休暇取得研究者、パートタイムで従事している研究者等に関しては事情を考慮して査定がなされた。こうした特殊な環境下にある研究者たちの全体に占める割合は前回RAE実施時の13%から、28%と飛躍的に増加している⁵。

英国における大学に対する研究評価 (REF) 制度—結果と総評【2/3】

このような活発な評価制度査定活動の中、2015年3月25日にイングランド高等教育財政会議 (HEFCE) が「REFlections: Evaluation of the Research Excellence Framework (REF) 2014 and a look to the future」を主催した。REF 結果発表後としては、第一回となる REF 制度評価の総括となる大規模なイベントで、講演者・内容も多岐に渡り英国全土から多数の参加者が集った。

開会の挨拶を兼ねた Professor Madeleine Atkins CBE (HEFCE, Chief Executive) の総評では、個々の優秀な研究成果事例を紹介するなど、制度のあり方に対する高い信頼性を自負すると共に、産学連携の重要性が強調された。同時に、制度が持つ様々な課題について、広く意見を収集、調査、報告をしていきたいと制度改善へ意欲的な姿勢を見せた。

また、Elsevier 社からの分野融合研究に関する発表では、論文の数といった具体的な根拠に基づいた複合分野の査定の仕方について紹介されたが、エビデンスを

しっかりと提示できる同社の方法論は、反面、柔軟性に欠けると、参加者から多くの質問・懸念が相次いだ。今回の REF における分野融合研究の扱い方についても、評価委員から改善点が挙げられた。例えば、パネル 26 の Sport and Exercise Sciences, Leisure and Tourism において、RAE 実施時と比較してパネル数が減ったために、同パネルにかなり多くの分野が詰め込まれてしまい評価が非常に困難だった、といった意見などがあり、分野融合研究についてはどのように扱うか、今後の REF においても大きな課題事項となることは必至であり、この点に関する HEFCE 等の意見聴取や査定等の取り組みに今後も注目していきたいところである。

今回の REF 制度実施で最も注目された「インパクト」についても、全般的な発表があった。研究・分析を通して政策方針を機関に助言する非営利組織の RAND Europe からは、今までにない試みということで、一から築き上げたインパクト評価制度について、どのような形で申請するかといった準備段階から評価の仕方に至るまで詳細な報告がなされた。申請された全てのインパクト事例を検索できるデータベースについてもシステムデザインから使い方に至るまで詳しい発表があった。イベント当日は、データベースの初公開日でもあり、会場では設置された数

台のパソコン上で多くの参加者が実際に試していた。

一連のインパクトに関する発表の中でも言及されていたように、インパクトの概念は、英国高等教育学術界に変革をもたらした。今回の REF が、学術界における大きな転機であったことは疑いようもない。しかし、参加者の「インパクトを創出する研究のみが素晴らしい研究であるわけではないということに留意する必要があるのではないか」という意見からもうかがわれるように、インパクト創出重視と研究のあり方との関係については今後も目が離せない。

研究成果、インパクト、研究環境に対する、論文数などの量的評価を基本とした評価法を査定する取り組みについても発表があり、最終報告書は2015年7月発表 (イベントも開催される予定) ということである。

また、HEFCE の自己評価の方法など今後に向けた取り組みについても説明がなされた。取り組み内容として、インパクト評価に関する調査、参加 HEIs によるフィードバック、評価メンバーによるフィードバック、制度にかかった費用と制度の長所・短所についての査定、英国における分野融合研究に関する調査、公平性・多様性保障に関する分析、インパクト事例研究とデータベースの分析、査定法に関する評価、オープンアクセス活動、などあらゆる面を網羅し、できる限

り多くの関係者を巻き込んで制度の見直しと改善を行っていく、という強い意気込みが感じられた⁶。

○ HEIs への配分発表 — 「勝ち組」「負け組」

3月26日には、REF 結果を受けた各 HEIs への研究助成配分額が発表されたが、各機関によって明暗が分かれた。Times Higher Education によると、配分額そのものの数字としては Manchester 大学が最も大きな減額 (過渡的研究助成⁷を含め、前年度比 - £1,060 万、-12.7%。同助成を含めない場合は、前年度比 - £1,420 万、-17.1%にも上る。)を強いられた一方、King's College London は金額面において最も大きな増額を記録し、University College London がそれに続いて、Russell Group 所属の在ロンドン大学が強さを見せたが、Northumbria 大学や Huddersfield 大学といった新大学 (1992 年以降に大学に昇格した大学) も健闘した。Manchester 大学の他にも、北部では苦戦を強いられた大学が多く、Bradford 大学、Sunderland 大学、Salford 大学などがそれぞれ前年度比 -30%以上となっている。また、London Metropolitan 大学と University of the Arts London がそれぞれ前年度比 -45%以上と大きな減額となった (表参照)。今回の REF より、4* を獲得した研究と 3* を獲得した研究の助成配分比率が 4 : 1 (前回までは 3 : 1) となり、傾斜配分の傾向がより一層強まっている⁸。



Professor Madeleine Atkins CBE (HEFCE, Chief Executive) による総評 ※協力: HEFCE

英国における大学に対する研究評価（REF）制度—結果と総評【3/3】

(表) HEIs 助成配分増減比較一覧

増額率最大ベスト 10				減額率最大ワースト 10			
順位	機関名	2015 助成額 (£)*	増減率 (%)	順位	機関名	2015 助成額 (£)*	増減率 (%)
1	Edge Hill University	1,159,276	+355.3	1	London Metropolitan University	1,330,129	-45.5
2	University of Bedfordshire	2,610,409	+142	2	University of the Arts London	3,519,985	-45.2
3	University of Huddersfield	4,836,973	+140.5	3	University of Salford	4,121,701	-39.1
4	Canterbury Christ Church University	2,025,199	+136.4	4	University of Sunderland	1,294,425	-33.2
5	Northumbria University	6,458,915	+105.5	5	University of Bradford	3,950,008	-33.2
6	Anglia Ruskin University	2,293,666	+99.5	6	Goldsmiths, University of London	5,437,357	-29.5
7	University of Lincoln	3,132,628	+87.5	7	St. George's, University of London	2,905,794	-27.3
8	University of Chester	1,250,274	+86.6	8	University of Manchester	68,800,260	-17.1
9	Middlesex University	4,427,531	+68.8	9	Loughborough University	17,929,680	-14.1
10	Coventry University	3,222,416	+66.4	10	Liverpool School of Tropical Medicine	4,876,361	-14.0

増額最大ベスト 10				
順位	機関名	2015 助成額 (£)*	前年度比 (£)	増減率 (%)
1	King's College London	65,340,267	+7,199,152	+12.4
2	University College London	131,610,416	+6,722,136	+5.4
3	University of Exeter	22,928,973	+3,870,756	+20.3
4	Northumbria University	6,458,915	+3,315,405	+105.5
5	University of Kent	13,964,715	+2,994,744	+27.3
6	University of Huddersfield	4,836,973	+2,825,763	+140.5
7	University of Oxford	139,061,600	+2,391,467	+1.7
8	London School of Economics	18,592,522	+2,012,104	+12.1
9	Middlesex University	4,427,531	+1,804,756	+68.8
10	Liverpool John Moores University	5,262,310	+1,791,911	+51.6

減額最大ワースト 10				
順位	機関名	2015 助成額 (£)*	前年度比 (£)	増減率 (%)
1	University of Manchester	68,800,260	-14,221,843	-17.1
2	Imperial College London	94,123,834	-4,935,796	-5.0
3	University of Cambridge	120,096,538	-4,276,357	-3.4
4	University of Leeds	43,849,972	-4,186,085	-8.7
5	Loughborough University	17,929,680	-2,994,570	-14.1
6	University of the Arts London	3,519,985	-2,897,523	-45.2
7	University of Salford	4,121,701	-2,649,866	-39.1
8	University of Liverpool	28,236,892	-2,581,212	-8.4
9	University of Sheffield	42,725,720	-2,530,086	-5.6
10	University of Birmingham	39,186,504	-2,385,883	-5.7

*純粋な REF の影響による配分額の変化を見るため、表中の 2015 助成配分額には過渡的研究助成（注 7 参照）は含まれていない。

出典：Times Higher Education
<http://www.timeshighereducation.co.uk/news/winners-and-losers-in-hefce-funding-allocations/2019306.article>
 'Who Fared Best And Worst'

むすびに

過去の偉人の研究を見ても、偶然から生まれたり、はじめから「インパクト」を目指して研究していたら生まれていなかったであろう業績は多々ある。しかしながら、国民の税金がどのように研究に用いられているのかについての説明責任が求められる現代においては、研究評価におけるインパクトの要素は重要で、これからの学術界は、世界的に、好むと好まざるとに関わらず益々インパクト重視の傾向となっていくであろう。同時に、社会的な影響は必ずしも大きくなくとも、優秀な研究は綺羅星のごとく存在するため、そうした研究についての保護はどうするのか、折り合いの難しいところであり、今後も模索は続くと思われる。融合分野研究の扱い方についてもまだまだ論議はこれからだろう。REF 制度における

課題については枚挙に暇がない。

準備段階から公明正大性、透明性を重視して練り上げられてきた REF 制度であるが、制度改善に向けて膨大な費用・時間をかけて評価見直しやフィードバック、報告書作成を行う財政会議の方針からは、関係者に対してのみならず、できるだけ全ての情報を公開し、何が起きているのかを詳細に説明することで、公共への説明責任を果たそうという強い意志が読み取れる。司会の David Sweeney 氏 (HEFCE, Director of Research, Education and Knowledge Exchange) による「本会は、REF2014 の締めくくりにあつたのは、次期 REF に向けた始まりの会である」ということは強調しておきたい。という閉会の辞が印象的であった。英国高等教育関係者のあくなき挑戦は終わらない。(西澤)

1 学術界に直接属さない、企業、公的あるいは慈善機関所属者で、大学の研究を自身の機関で活用する、あるいは、研究者と共同開発をしたり委託研究を行うなど、大学研究に深い関わりを持つ者。また、その他の事情で英国高等教育財政会議から評価メンバーとなるよう要請された者。
<http://www.ref.ac.uk/about/users>

2 新制度移行の経緯について詳しくは、JSPSLondon ニュースレター vol41 「英国学術調査報告」を参照のこと。
<http://www.jps.org/newsletter/JSPSNL41H.pdf>

3 REF 全概要 <http://www.ref.ac.uk/media/ref/content/pub/REF%20Brief%20Guide%202014.pdf>

4 <http://www.timeshighereducation.co.uk/news/ref-2014-who-gave-best-performance/2017813.article>

5 <http://www.ref.ac.uk/media/ref/content/pub/REF%20Brief%20Guide%202014.pdf> 3 ページ 'Equality and diversity'

6 http://www.hefce.ac.uk/news/Events/2015/Name_101448.en.html

7 今年度変更のあった政策の影響で、各機関の財政状況に昨年度と比べて著しい変化が生じてしまうことを避けるために 2015 年度に限って過渡的助成として、研究助成額とは別に設けて、それぞれ配分している。
http://www.hefce.ac.uk/news/newsarchive/2015/Name_103785.en.html Notes1

8 <http://www.timeshighereducation.co.uk/news/winners-and-losers-in-hefce-funding-allocations/2019306.article>



世界中のマラソン好きが集結するロンドンの春の風物詩。
沿道からはさまざまな言語による熱い声援が飛んでいます。

赴任以来ほぼ一年、ご多分にもれず体験記を記したいと思います。

ロンドン奮戦記①

まず、ロンドンに住むことは、気候的にも日常品の物価的にも非常に快適であります。昨年5月にアパートに入って、最初にしたことは、「クーラーのスイッチはどこかいな？」と探しまわりました。当然見つかるはずはありません。「無い」のですから。いろいろ人に聞いて廻って分かりました。夏にクーラーは不要、冬はそれほど寒くは無い（もちろん外出にはコートが必要ですが）。ロンドンには雨が多いいのは事実です。しかし、軽い雨で、すぐに止む。傘はほとんど使いません。私もこの一年で2回ほどしか傘をさして通勤はしませんでした。私は暑がり、寒いには強い。ですから、私の人生経験の中では、ロンドン生活が一番性に合っています。

物価はそれほど高くはない。消費税を含めても、野菜や肉は日本より安い。ここに来て初めて知ったのですが、イギリスではラム（仔羊の肉）が美味しいし、値段も手頃です。日常的に「いける」ワインが比較的安い。これ、ワイン好きにとっては助かります。しかし、ウイスキーの値段だけは、どういわけか輸入品として日本で購入するより高い。これ、困っています。というわけで、毎日、ワインと野菜と肉少々、という健康的な食生活を送っております。

次に、公共交通が発達していることも

日常生活には便利であります。バスと地下鉄でどこにも行ける。ただ、バス停では手を挙げないとバスは停まってくれません。プラットフォーム上では、電車がどこに止まるかは定かではありません。地下鉄なんて、エスカレーターやエレベーターの無い駅がいっぱいあります。また、地下10階ほど深く「チューブ」状のエスカレーターで潜らないと乗れない路線も多々あります。笑ってしまいます。古い歴史があるにもかかわらずバス、地下鉄、鉄道に関しては、「故障でいつ途中運休になるかわからん」というのも許しません。

しかしながら、道路にはBus Laneというのが至る所にあって、そこはバス、タクシー、自転車しか通れない。これがあつためにラッシュアワーでも比較的スムーズに流れます。地下鉄のプラットフォームも、出口へ行く人の流れと乗り込む人の流れが別々の通路で統制されています。上手く運営していると思います。

第三に、ガイドブックにあるように当然のことながら、ロンドンの文化・芸術を楽しめることは最高です。博物館、美術館は言うに及ばず、オペラやシンフォニーからミュージカルまで幅広く満喫できます。とにかく場所的に手軽で入場料も日本と比べて安い。私は日本に20年住んで、演奏会や展覧会には1~2回しか行けませんでした。ところがロンドンに来て10ヶ月、演奏会、展覧会には3

~4回行く機会がありました。これ、誰にも言いたくないのですが・・・：Westminster Abby、ここは昼間の見学にはかなりの入場料が必要ですが、夕刻のミサ(Evensong)には無料で入れます（もう言っちゃいましたね!）、聖歌隊の合唱付きです。楽しめます。

ロンドンには至る所にパブがあり、昼夜を通して人が入っています。ここは「歓談の場」とでも言うのでしょうか、とにかく「話好き」「論議好き」が集まっています。昼食はビール一杯と会談、という連中がひしめいています。夜もパブではあまり食べない。飲んで話をする、というのがロンドンナーのようです。私には非常に合います。

最後はやはりBritish Englishです。これを克服するのは難題です。もちろん、まずは発音です。それから、言葉使い。私はアメリカ生活が長かったため、アメリカ英語にかなり毒されていました。今では随分と慣れてきましたが、赴任当時は非常に違和感がありました。初めてロンドンの地下鉄に乗った時のことです。ホームで降りて、出口を探すのに10分かかりました。Exitというサインはホーム上どこを探しても見つからない。「Way Out→」ばかり。これが「出口へ」というサインだと気付くのに手間取ったわけです。63歳になってはじめてWay Outという言葉に出会ったわけです。列車の車掌が停車駅の案内をするときに、「We

are calling at・・・」と言うのも面白い。当然ですが、イギリスでは、アメリカでは出くわさない単語・言い回しが多々あります。一つひとつ勉強するしかありません。

つい最近、あることでUnited Airlineに電話することがありました。もちろん電話口に出たのは「典型的アメリカ人」でした。何回も電話口で「Excuse me?」と聞き返している自分にガッカリするやら驚くやら。ロンドンの発音に慣れてきて、アメリカの発音は聞き苦しいと思うようになったのでしょうか。

私がいろいろな県の出身者の日本語を聴けば、青森、東京、横浜、名古屋、大阪、広島、長崎、鹿児島発音は、それなりに判別できます。日本語を母語していませんので、当たり前です。いわゆる「イギリス人」に尋ねたところ、スコットランドの言葉、イングランドの言葉、ウェールズの言葉、北アイルランドの言葉は当然判別できる、とのこと。当然です。これが、Native Speakerということなのでしょう。Native Speakerになるのは至難のわざだと・・・。

さて、以上が私生活における体験ですが、最後に、センターとしての1年間の活動を簡潔にふり返りたいと思います。ニュースレターで毎回報告しておりますように、年に5回のJSPS London主催の日英合同シンポジウムを開催しました(表1)。それ以外にも20数校を訪問し

て、精力的に Promotion 活動をしてきました (表 2)。シンポジウムでは「日本からの発信」「英国の情報収集」を狙っています。Promotion 活動では、日英間の対等な関係での共同研究促進のための数々

の Fellowship や共同研究費の存在をアピールしています。これらの活動は JSPS London の存在意義にかかわるもので、今後も発展的展開をしていくつもりです。

(表 1) UK-JSPS Symposium Scheme 採択シンポジウム (2014 年度)

日程	タイトル	会場
2014 年 7 月 3 日	From Duplexes to Quadruplexes- Understanding DNA Structure and Function	University of Reading
2014 年 7 月 9 日~ 11 日	THE UNIVERSE IN THE LIGHT OF AKARI and Synergy with Future Large Space Telescopes	University of Oxford
2014 年 8 月 11 日~ 12 日	JSPS Symposium on Nanoscale Physics of Quantum Materials	University of Leeds
2014 年 9 月 15 日~ 16 日	JSPS Symposium on Interscale Transfers and Flow Topology in Equilibrium and Non-Equilibrium Turbulence	University of Sheffield
2014 年 11 月 10 日	JSPS UK/Japan Symposium on Computer Graphics and Virtual Reality	The University of Edinburgh

(表 2) JSPS Programme Information Event を実施した大学・研究機関 (2014 年度)

日程	大学/研究機関	日程	大学/研究機関
2014 年 6 月 17 日	Regent's University	2014 年 11 月 19 日	Cardiff University
2014 年 7 月 3 日	University of Reading	2014 年 11 月 20 日	University of Bath
2014 年 7 月 10 日	University of Oxford	2015 年 2 月 9 日	John Innes Centre, Norwich Research Park
2014 年 8 月 12 日	University of Leeds	2015 年 2 月 9 日	University of East Anglia
2014 年 8 月 13 日	University of Birmingham	2015 年 2 月 10 日	University of Essex
2014 年 9 月 15 日	University of Sheffield	2015 年 2 月 11 日	Brunel University
2014 年 9 月 15 日	Sheffield Hallam University	2015 年 2 月 12 日	King's College London
2014 年 9 月 16 日	The University of Nottingham	2015 年 2 月 13 日	Royal Holloway, University of London
2014 年 10 月 2 日	Newcastle University	2015 年 2 月 13 日	PAMELA, UCL
2014 年 10 月 3 日	The University of Liverpool	2015 年 2 月 23 日	De Montfort University
2014 年 11 月 10 日	The University of Edinburgh	2015 年 2 月 23 日	University of Leicester
2014 年 11 月 11 日	University of Stirling	2015 年 2 月 24 日	The University of Manchester
2014 年 11 月 12 日	The University of Aberdeen	2015 年 2 月 25 日	Lancaster University
2014 年 11 月 18 日	Aberystwyth University	2015 年 2 月 25 日	University of Central Lancashire
2014 年 11 月 19 日	Swansea University		

赴任のごあいさつ

2015 年 4 月に成瀬アドバイザー (文部科学省)、亀澤国際協力員 (長崎大学)、岡田国際協力員 (島根大学) が新たに着任した。以下、新任職員からのコメントを紹介する。

成瀬アドバイザー ■ 当センターでは、英国の高等教育・学術関係の動向を調査し、日本の関係者の皆様に役立つ情報を提供する業務を担当します。

英国は日本が模範とした制度も多く、現状にも共通する点があります。特に高等教育の国際化に関しては日本に先んじており、参考となる取り組みも多く行われていると思いますので、時宜に適った情報を、背景も含めお伝えしてまいりたいと考えています。

個人的には、これまで文科省等の複数の部署で国際業務を担当してきましたが、海外勤務は初めてとなりますので、より深く異文化と交流し、国際的視野を身につけることが目標です。また、各大学から派遣されている同僚スタッフや在外研究者の皆様から、より現場に近い位置で大学行政を学ぶ機会として、多くのことを吸収できればと思っています。

亀澤国際協力員 ■ 当センターでは主に会計業務を担当します。

ロンドンセンターという恵まれた環境で仕事ができることを大変嬉しく感じています。アホ、ゴミ、寝言の三段活用が口癖のセンター長、そのセンター長から世代を超えて友達と言わしめる人心掌握術をもつ副センター長、はたまたセンター長から「文科省から俺を監視しにきたんか」と言われても全く怯まない

アドバイザー、パブで知らない人に平気で話しかけるアウトゴーイングな同期、百戦錬磨と思しき現地職員のお二人。

…このようなすばらしい環境の中、日英間の国際学術交流の促進に少しでもお役に立てるよう微力ながら頑張ります。1 年間どうぞよろしくお願いいたします。

岡田国際協力員 ■ 当センターでは主に総務・広報業務を担当します。

初めての海外生活、英語での業務や事業ブレゼン、異国の方々との交流。異文化に触れることで物事を相対的に見れる能力を養いたいと思い、希望でワクワクしながら赴任して参りました。

1 年間というのは、思いのほかあっという間に過ぎてしまうと思います。1 年後、「自分はこういうところは成長できた、帰国後に活かせる」という達成感を持って帰任できるよう、毎日を大切に、新しいことに積極的に挑戦していきたいと思っています。

どうぞ、よろしくお願いいたします。



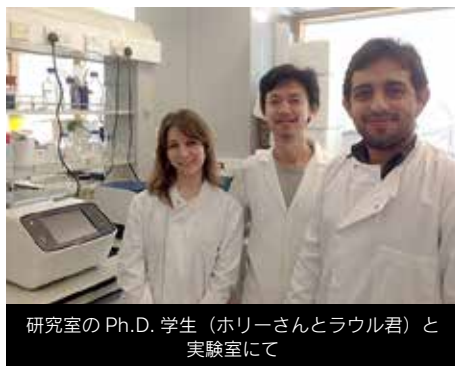
(左から) 亀澤国際協力員、成瀬アドバイザー、岡田国際協力員



在英研究者の者窓から

シャソウ

第三回



研究室の Ph.D. 学生（ホリーさんとラウル君）と実験室にて

英国で研究を行っている日本人研究者の数は、JSPS London の在英日本人研究者 (JBUK) にご登録いただいている方だけでも 300 名以上。そのような方々は、どんなきっかけで渡英し、どのようなことを感じ、どのような研究をされているのでしょうか。このコーナーでは、様々なバックグラウンドの在英研究者の方に、普段なかなかかかっていることのできないそれらの内容について、語っていただきます。

アバディーン大学メディカルサイエンス学部 関戸 良平 講師
Dr. Ryohei SEKIDO

1995 年 大阪大学大学院理学研究科博士課程修了、博士（理学）
1995 年 - 1998 年 大阪大学細胞生体工学センター 非常勤講師及び JSPS フェロー
1998 年 - 2013 年 National Institute for Medical Research (2000 年まで EMBO & HFSP フェロー、その後 MRC research associate を経て 2013 年まで MRC Senior Investigator Scientist)。2013 年半ばより現職

ヒトには不妊症や性同一性障害をはじめ、性に関する疾患が数多く存在します。また最近では男女間で罹患率の異なる疾病に対する性差医療も注目を集めています。私はこのような性差がどのような遺伝子によって決まるのかを研究しています。私が学生の頃、ヒトの性を決定する（胎児を雄にする）遺伝子が英国のグループによって初めて発見され、将来この分野の研究がしたいと思っていたことが現実になりました。留学当初は 2～3 年で日本に戻るつもりでしたが、気がつけば 17 年も経ってしまいました。一昨年 15 年間慣れ親しんだロンドンを離れ、文化も気候も違うスコットランドにきました。

長い間この国にしていると「日本より英国のサイエンスの方が優れているか？ 研究しやすいか？」とよく聞かれますが、私は必ずしもそうは思いません。英国アカデミズムの歴史と栄光は言うまでもないことです。17 世紀半ばに既に Royal Society を設立し、ノーベル賞受賞者は 115 人と米国に次いで 2 番目です。しかし、近年の日本の躍進は目覚ましいもの

があります。私の学生時代は欧米が最先端の研究を行っていたので留学せざるを得ませんでした。現在は日本でそういう研究ができるようになりました。英国でも研究職や研究費の獲得が困難である状況は日本と同じです。インフラやコンプライアンスの面でむしろ日本の方がやり易いでしょう。人材面でも学生やポスドクの質を比べたら全般的に日本の方が勝っていると思います。

英国が明らかに優れている点はポスドクや PI の国際性と流動性です。彼らがこの国のサイエンスを支えていると言っても過言ではないでしょう。必ずしも世界各国から優秀な人材が集まっているわけではないですが、ひと握りの研究者は卓越しています。そういう才能に触れた時この国で研究していて良かったと思えますし、その機会が日本よりは多い気がします。彼らは英国で研究を進展させ、英国を離れても共同研究という形でつながっています。こうやってネットワークを広げて行くところがこの国の強みでしょう。

ここ数年、日本の大学や研究機関も「国

際化」に重点を置くようになりました。日本政府は国際的な評判を高めるべく、世界大学ランキングの 100 位以内に 10 校、ノーベル賞倍増、大学発ベンチャー起業の支援など莫大な資金を捻出していると聞きます。しかし、なぜ行き先はいつも特定の大学だけなのでしょう？ いずれ 10 校がランクインしてもそれを保つには継続的な資金が必要ですし、その頃にはそれ以外の大学の士気は下がっているかも知れません。個人的には更に 20 校くらいは世界と渡り合えるレベルにあると思っていますが、このような一極集中型の戦略はその芽を摘んでしまわないか危惧しています。一部の研究には高価な技術が不可欠ですが、斬新な発想を養うために多額な資金は必要ありません。因みに、英国の大学のノーベル賞受賞者は 25 大学（出身と所属を合わせ）から出ています。日本は約半分の 12 大学です。もう少し均等に資金を配分して、ランクイン可能な大学の裾野を広げた方が将来的にノーベル賞倍増につながるかもしれません。1 大学当たりの金額は減ります

が、限られた予算の中で工夫を凝らして研究を進めて行く方が日本人の性に合っているのではないのでしょうか。

最後にスコットランドについて紹介します。スコットランド人は我々のような「よそ者」を歓迎してくれますが、自国の文化には高い誇りを持っています。ひとりで形容するなら「和して同ぜず」型です。英国の他の地域と異なる独自の教育制度を頑に守っているのも頷けます。こだわりを持った職人気質が多く、日本人と通ずるところがあります。先程ノーベル賞について触れましたが、受賞者のうち 31 人がスコティッシュです。人口が英国全体の 1 割に満たないことを考えればその貢献度の高さがわかります。もちろんそれ以前からスコットランドの学術は際立っていて、イングランドにオックスブリッジの 2 大学しか存在しなかった 16 世紀に、スコットランドには既に 4 つの大学が設立されていたことから窺えます。スコットランドにはスコットランドの研究機関のみを対象にしたグラントが多数あります。金額は決して多くないですが、全国規模のグラントより競争が緩やかなので初めて独立する研究者にはちょうどいいと思います。若手研究者の皆さん、次の行き先にスコットランドを考えてみてはいかがでしょうか。

JBUK へのご登録はこちら ご希望の方に、JSPS London が開催するネットワークイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。下記リンクにてご登録ください。なお、対象は英国の大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。
リンク：<https://ssl.jps.org/members/?page=regist>

University of Leicester 他 4 大学にて事業説明会を実施 (1/2)

2015年2月23日から25日にかけて、竹安センター長、松本副センター長、Ms Watson International Programme Co-ordinator、藤田国際協力員は、University of Leicester (2/23、参加者約 11 名 (パネルディスカッション形式))、De Montfort University (2/23、参加者約 25 名)、The University of Manchester (2/24、参加者約 40 名)、Lancaster University (2/25、参加者約 35 名)、University of Central Lancashire (2/25、参加者約 35 名) の 5 つの大学にて事業説明会を実施した。いずれも大学側からのリクエストを受け実施したもので、De Montfort University、Lancaster University、University of Central Lancashire への公式訪問は今回が初めてであった。Ms Watson International Programme Coordinator によると、英国における JSPS の評判が高まるにつれ、大学からの事業説明会実施の依頼がより増えてきているという。

イングランドのほぼ中心部に位置する Leicester へはロンドンより北へ列車で約 1 時間。今回の出張は、そこから北西の方角へ、Manchester を経て Lancaster まで、Leicester からさらに合計約 3 時間、北上していく行程となった。

University of Leicester と The University of Manchester は、19 ~ 20 世紀初めまでに設立された伝統ある大学の一つ。Lancaster University は 1960 年代に設立された比較的新しい大学であり、De Mont-

fort University、University of Central Lancashire は 1992 年にポリテクニクが昇格する形で設立された大学である。

University of Leicester は、世界大学ランキングでは 200 位前後に位置し、特に宇宙科学、遺伝学、博物館学等で名高い。説明会後には、参加していた博物館学の研究者の好意で博物館学の施設内を見学することができた。

De Montfort University は、1992 年に設立された大学の中でも、研究の面で最も高い評価を得ている大学の一つである。説明会前のコーヒープレイクで、初対面かつ分野の異なる研究者同士が活発に交流を図っていた様子が非常に印象的であった。その際、数人の研究者に大学の特徴を尋ねたところ、応用科学に強く、また、'Unity in Diversity' があるという答えが得られた。参加者には、'Vice-chancellor's Future Research Leaders' を受賞したばかりという優秀な女性研究者も含まれていた。

The University of Manchester は、英国で最も多い約 34,000 人の学生を有する。世界大学ランキングでは約 50 位までに入り、ラッセルグループの一員でもある。2020 年までに、世界の研究大学のトップ 25 までに入ることを目指している。説明会前には、Associate Vice-President for Research を務める Prof. Matt Lambon-Ralph と、マンチェスター大学と日本の連携強化に関する打ち合わ

せを行った。大規模な大学であるため、日本との共同研究を望む研究者の数も多く、事業説明会後には、個別相談のコーナーが設けられ、順に訪れた研究者グループ (事前に個別相談を予約した約 10 グループの研究者 (各グループ約 1 ~ 3 名)) のそれぞれに対し、きめ細やかな助言を行うことができた。

Lancaster University は、世界大学ラン

キングでは 150 位前後に位置し、2008 年の Research Assessment Exercise において 60%以上が 'world-leading' または 'internationally excellent' と評価されるなど、研究に強みを有する大学である。大学の周囲には、車道の脇などに時折、羊のいるなだらかな草原が現れる。大学構内も芝生が多く広々とした雰囲気である。



ランカスターの歴史ある街並み

University of Leicester 他 4 大学にて事業説明会を実施 (2/2)

University of Central Lancashire は、パートタイムの学生を含めると約 30,000 人の学生を有する規模の大きな大学である。前身は 1828 年の the Institution for the Diffusion of Knowledge に遡る。研究では、天文学やナノテクノロジー、言語学やジャーナリズム等の分野で確固たる評判を得ている。説明会開始前には、量子物理学や化学のラボ紹介、School of Art, Design and Performance の施設紹介をメインとしたキャンパスツアーが行われた。後者では、英国内でも極少の大学しか有していないという貴重な製版機材も見学することができた。

なお、The University of Manchester、Lancaster University、University of Central Lancashire で設けられた、各大学の

JSPS Alumni による日本での研究経験を紹介するプレゼンテーションは、「JSPS のプログラムを利用して日本で研究がしたい」と聴衆に思わせるような魅力的なもので、彼らの協力のお陰で、事業説明会がさらに有意義なものとなった。

今回の事業説明会では、英国大学で活躍されているが JBUK には未登録の在英日本人研究者の先生方を何人も見つけることができた。また、パネルディスカッションや個別相談の中で、日本からの博士課程学生等を受け入れたいと考えている複数の研究者の存在を把握できた。さらに、University of Central Lancashire は、一般的にはあまり知られていないが特色ある学部をもっていることが分かった。これらはいずれも、それぞれの大学を訪

れて事業説明会を行って見なければ得られなかったものであり、センターとして、実際に大学に足を運ぶことの重要性が改めて感じられた出張であった。

(藤田)



School of Art, Design and Performance の所有する製版機材

英国の寄付文化

JSPS London オフィスはロンドンのターミナル駅の一つである Euston 駅の近くに所在しています。JSPS London に配属されてからの 1 年間、毎日通勤でこの駅を利用していますが、駅構内でチャリティー活動を行っている団体を見ることが出来ます。

例えば、11 月 11 日の終戦記念日（第一次・第二次世界大戦の死者を追悼する記念日）には、退役軍人のために募金をする、引き換えに造花のポピーをもらえます。道を歩く人々はもちろんのこと、政治家、テレビ番組の司会者も赤いポピーを胸につけ、戦没兵士を含む戦争で犠牲になった人全般へ追悼の気持ちを表します。2014 年は第一次世界大戦勃発から 100 年ということもあり、ロンドンの有名な観光名所であるロンドン塔が 80 万本以上の陶磁器製の赤いポピーで埋め尽くされ、例年よりも多くの寄付が集まったようです。



JSPS スタッフコラム

3 月 13 日にはレッドノーズデーとして、「赤い鼻」を付けて、貧困や社会的な不平等への支援を訴えるチャリティーイベントがありました。元々は英国コメディアンが参加するチャリティー企画だったようですが、今では全国規模に浸透し、当日は道を歩く子供や車のフロントグリルにも赤い鼻がつけられていました。

上記のような大きなイベントのほかにもさまざまな目的のチャリティーが年中街中で開催されており、目立つ服装やきぐるみを着たチャリティー団体が小銭の入ったバケツなどを片手に募金を呼びかけている光景をよく見かけます。

また、町のあちらこちらにいらなくなった本や服などを持っていくと引き取ってくれるチャリティーショップというものもあります。誰かがいらなくなったものを売って、寄付金を集めるための店なのですが、日本のリサイクルショップとは違い、品物は「寄付する」形となり、「買い取り」は基本的にしていません。店員も基本的にはボランティアで運営しているようです。

大人だけでなく、子供も学校を通じて楽しんでチャリティー活動へ参加することができるようで、子供の頃からこのような機会を通じて積極的に社会へ関わっていく教育がされているようです。

(香月)

Pre-Departure Seminar and Alumni Evening 開催



Pre-Departure Seminar and Alumni Evening 参加者と

2015年4月17日、JSPS 外国人研究者招へい事業に新規採択されたフェローを招き、Pre-Departure Seminar が開催された。当セミナーは、本事業を最大限に活用できるよう、参加者に日本での研究・日常生活に関する情報提供を行うとともに、参加者間の交流を促すことを目的に、例年4月と10月頃の年2回開催している。今回は32名の出席があった。



JSPSパンフレットを手に取る参加者の様子

竹安センター長の開会挨拶に続き、渡日後の交流促進を目的として参加者が順に自己紹介を行った。フェローの派遣先は、北は東北大学から南は九州大学まで、研究分野も人文・社会科学から自然科学まで多岐にわたっている。その後、松本副センター長から本会の事業概要、亀澤国際協力員からJSPS サマー・プログラムの詳細について説明がなされた。

次いで、2014年にサマー・プログラムに参加した前フェローのMs. Christina Wayman (King's College London) 及びJSPS 英国・アイルランド同窓会員のDr. Steven Hayward (University of East Anglia) から、プログラムの体験談や日本での経験を最大限有効なものとし、またそれを英国でのキャリアに生かすため



川並講師による特別講演

義、目的及び活動内容が紹介されるとともに、入会の特典である同窓会員対象のBRIDGE Fellowship Programme やシンポジウムスキームの説明が行われた。

その後、同窓会員のProf. Thomas Wirth (Cardiff University) 及び在英日本人研究者の山崎康弘ニューカッスル大学専任講師から、日英研究者間の将来的な共同研究への発展を目的として、研究内容の紹介が行われた。

また、引き続き行われた特別講演では、川並浩子ランカスター大学専任講師から、「A Brief to Religious Temples in Japan」と題して、日本の宗教や神社・寺社についてユニークな講演が行われ、聴衆がその説明に聞き入った。

その後行われた歓談では、参加者は会場に熱気がこもるほど大いに交流を深め、イベントは盛会のうちに終了した。

(亀澤)

の、自身の経験を踏まえた具体的かつ親身で実用的なアドバイスが贈られた。また、大和日英基金及び笹川平和財団のゲストスピーカーからは、事業終了後、日本との研究をさらに継続するための助成プログラムについて紹介があった。

Pre-Departure Seminar 終了後、JSPS 英国・アイルランド同窓会員、在英日本人研究者、日英学术交流に関心のあるゲストの方々と新規フェローの交流促進を目的としたAlumni Evening が開催され、参加者は70名以上に上った。同窓会長のDr. Ruth Goodridge (University of Nottingham) による挨拶及び講演では、同窓会の意



ティータイムで意見交換する参加者

退任のごあいさつ

2015年春、それぞれ文部科学省、熊本大学、東京大学から JSPS London に着任した熊谷アドバイザー、香月国際協力員、藤田国際協力員が任期を終え帰国した。以下、帰国職員からのコメントを紹介する。



2014年4月21日の日本経済新聞には主な大学の入学式で学長が新生生にかけた言葉が記事になっており、その中で、名古屋大学濱口学長の「海外に出て孤独の中で自分の力を試して」という言葉が紹介されています。着任後、初めての海外生活にとまどい、不安で一杯だった心にとても響いた言葉でした。その後、様々なバックグラウンドを持つ人々が集うロンドンという街やこのオフィスにおいて、自分の想定外のことが起こる度にこの言葉を思い出し、自分の枠を壊してみよう、自分の力を試してみようと思いつつ過ごしてきたこの1年は貴重な経験となりました。こんな私を海外へ放り出していただいた方々、私の大きな笑い声に耐えてくださったセンターの皆様、そして私の破壊的な英語に一生懸命耳を傾けてくれた英国で出会った全ての皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

熊谷 果奈子



2014年4月からの1年間、世界中から多種多様な人が集まるロンドンにおいて、業務においても私生活においても様々なバックグラウンドをもつ多くの人々と触れながら生活することは、自分にとってとても刺激的でした。もう一度ロンドンの公園で過ごす素晴らしい夏の休日を経験せずに帰国してしまうことはとても心残りです。業務においては、英国内の各大学を回っての事業説明会では研究者や大学関係者の方々から多くのお話を伺うことが出来、日本の大学にいただけでは得ることのできない経験を積むことができました。この研修で学んだことを日本での業務でも活かせるよう、帰国後も努力を続けていきたいと思つています。最後に東京本部から併せて2年間の研修の機会を与えていただいた日本学術振興会及び熊本大学の皆様に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

香月 壮之介



朝、ベランダの扉が開まらなくなり大慌てした初出勤の日。駅構内の標識を凝視し正しい地下鉄に乗り、無事職場の最寄駅に到着したものの、駅から徒歩数分のオフィスまで地図を片手に20分。帰宅時には自分の家の場所が分からない。あれから1年。成長できた部分、経験できたこと・学んだことは数え切れないほどあると思いますが、今の自分は、自分に足りない部分、1年間ではできなかったこと・学びきれなかったことの方ばかりを日々思い浮かべています。研修の成果をきちんと生かせるようになるため、帰国後、自分自身でさらに努力を継続していきます。自ら望んで飛び込んだものですが、大きな環境の変化の中での仕事と生活。様々な方々の支えのおかげで、無事研修を終えることができました。お世話になった全ての方々と、研修の機会を与えていただいた日本学術振興会、東京大学に、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

藤田 明子

撮影：熊谷アドバイザー



このページでは、JSPS にて実施する国際交流事業やイベントなどを抜粋して紹介します。なお、詳細は各事業ウェブサイトをご覧ください。

◆ JSPS が募集する国際交流事業

外国人特別研究員（欧米短期）

欧米諸国（アメリカ合衆国、カナダ並びに欧州連合（EU）加盟国（2015年4月1日現在）及びスイス、ノルウェー、ロシア）の博士号取得前後の優秀な若手研究者に対して、我が国の大学等において日本側受入研究者の指導のもとに、共同で研究に従事する機会を提供します。

☆ ロンドンセンターは、欧米短期事業について、独自の推薦枠を有して募集を行っています。

< 東京本部への応募と

ロンドンセンターへの応募の違い >

締切や研究開始時期などの他に主に異なる点は、①応募できる要件と ②申請方法です。

① アメリカ合衆国、カナダ、EU 加盟国並びにスイス、ノルウェーの国籍もしくは永住権を有し、かつ、英国の大学や研究機関に所属している方でなければ、ロンドンセンターへ応募することはできません。

② ロンドンセンターへ応募する際には、外国人研究者が自身で直接ロンドンセンターへ応募書類を提出するのに対し、東京本部へ応募する際には、日本側の受入研究者が、受入研究者の所属機関を通して応募します。

< JSPS 東京本部受付分 >

申請受付期間：

2015年7月6日(月)～7月10日(金)
※ 2015年度募集は年4回となっているため、今回が2015年度分募集の最終受付（第4回）です。

※ 上記の申請受付期間は所属機関長から本会に申請書類が提出される期限であり、申請者が所属機関長に申請書類を提出する期限は、上記より前であることが予想されますのでご注意ください。

来日（研究開始）時期：2016年1月1日～2016年3月31日の間に来日し、滞在期間は1ヶ月以上12ヶ月以内
支給額：① 往復航空券 ② 滞在費 362,000円/月（日本における研究開始時に博士の学位を有する者）、200,000円/月（日本における研究開始時に博士の学位を有しない者）③ その他（海外旅行傷害保険、渡日一時金等）

申請方法：日本側受入研究者が JSPS 東京本部に申請

採用予定件数：年間計 60 名程度

募集要項等：www.jps.go.jp/j-fellow/j-fellow_14/data/A.pdf

< JSPS London 受付分 >

JSPS London では外国人特別研究員（欧米短期）募集を年2回行っており、2015年度第2回分の申請受付締切は、6月1日（月）です。

募集要項等：www.jps.org/funding/2015/03/the-jps-london-call-for-the-prepost-doctoral-fellowship-for-foreign-researchers-short-term.html

頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム

大学等研究機関が、海外のトップクラスの研究機関と世界水準の国際共同研究を行うことを通じて、相手側への若手研究者の長期派遣と相手側からの研究者招へいの双方向の人的交流を展開する取組を支援します。なお、本プログラムでは、高いポテンシャルは有しているものの、国際研究ネットワークに十分アクセスできていない研究グループを特に支援します。募集要項等：

www.jps.go.jp/j-zunoujunkan3/shinsei_h27.html#koubo_sinsa

※ 日英交流事業の最新公募情報はこちら：www.jps.org/funding/index.html

◆ JSPS London イベント情報 シンポジウム

JSPS London は、シンポジウム開催スキームによって採択されたシンポジウムを、年間を通して開催しています。シンポジウムに関する情報は、詳細が決定され次第以下に掲載される予定です。
→ www.jps.org/event/index.html

JSPS 事業説明会

JSPS London では、定期的に英国内の大学等を訪問し、JSPS が実施する事業の紹介を行っています。所属機関での JSPS 事業説明会の開催をご希望の場合は、enquire@jps.org までご連絡ください。

◆ JSPS 各種情報を定期的にお届けします！

JSPS London facebook ページ

Facebook ユーザーの方には、公募情報や英国学術情報等ウェブの更新情報をタイムリーにお届けします。

→  ページ

<https://www.facebook.com/jps.org>

在英日本人研究者の皆様へ

ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。下記リンクにてご登録ください。なお、対象は、英国の大学・研究機関に所属する研究者（ポストドク・大学院生含む）及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。

→ <https://ssl.jps.org/members/?page=regist>

JSPS Monthly（学振便り）

JSPS の公募案内や活動報告等を、毎月第1月曜日にお届けするサービスです（購読無料）。情報提供を希望される方は、下記のリンクにてご登録ください。

→ www.jps.go.jp/j-mailmagazine

（西澤）

編集を
終えて

今号のニュースレターでは、巻頭特集の日本と EU の教育研究交流、英国人がプレゼンテーションスキルが高い理由、プレパチャーセミナーの様子など、英国の学術動向や文化、当センターの活動報告を幅広く掲載しております。

ロンドンでは冬から春にかけて日照時間が日に日に延びていき、今では夜 9 時頃まで明るいです。とはいえもの気温が低い日も多く、薄手のカーディガンは手放せませんが。

今年度のニュースレターは、読者の皆様に英国の「旬」を感じていただこうと、季節をテーマにした表紙でお送りしてまいります。今号の表紙は、英国に春の訪れを知らせてくれるウェールズ地方の代表花ラツパ水仙畑です。鮮やかな黄色が見る人にエネルギーを与えてくれます。

当センターでは、今後も表紙に見合った旬の情報を、眼前一杯に広がったラツパ水仙畑のように幅広く提供できるよう努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いたします。

(岡田)



監 修： 竹安 邦夫
編 集 長： 松本 秀幸
編集担当： 岡田 高文

 JSPS London

日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)

14 Stephenson Way, London NW1 2HD United Kingdom

TEL: +44-(0)20-7255-4660 / FAX: +44-(0)20-7255-4669

email: enquire@jps.org Website: <http://www.jps.org/index.html>

Find us on
facebook